

メッセージアウトライン マタイの福音書5：43～48 「天の父の子どもの生き方」

[43-44]「『あなたの隣人を愛し、あなたの敵を憎め』と言われていたのを、あなたがたは聞いています。しかし、わたしはあなたがたに言います。自分の敵を愛し、自分を迫害する者のために祈りなさい」

「あなたの隣人を愛せよ」との言葉は旧約聖書のレビ記19:18の引用。次の「あなたの敵を憎め」という言葉はそのままの形ではどこにも見られないが、これは旧約聖書全体から導き出された結論であると考えられる。たとえば指導者モーセによってエジプトを脱出したイスラエルの民は40年の荒野の旅を終えて約束のカナンの地に入る時、そこに住んでいた先住民族を滅ぼすようにと命じられている。→申命記7:1-5 それゆえこのような例から推測すると、この言葉は他国人には憎しみや敵意をもってよいが隣人である同胞イスラエル人は愛さなければならないと教えているようにみえる。

それで律法学者やパリサイ人たちは自分自身のように愛さなければならない隣人とは同胞イスラエル人であり、敵である外国人、異邦人には憎しみや恨みや敵意、殺意の対象となると考えたのである。しかし、イエスは44節で「自分の敵を愛し、自分を迫害する者のために祈りなさい」と言われる。ここでも私たちは5:38-42までで教えられたのと同じ原則に直面する。つまり、他人に対するクリスチャンの態度はどうあるべきかという問題である。

先ほどの旧約聖書の箇所について言えば、先住民族を滅ぼせという命令は、彼らが真の神を信ぜず、偶像礼拝を行い、自分の子を火で焼いて偶像神にささげるなどの罪を犯し続けていたので、神は長い忍耐期間の後、イスラエル民族を用いて滅ぼされたという経緯がある。長い間、彼らが神のもとに立ち返ろうとしなかったがゆえの神のさばきである。そして神はそのためにイスラエルを用いられたのであった

イエスは自分を憎む敵に対する個人的復讐については5:38～42ですでに教えられた。そして今度の教えは特定の個人ではなく、私たちが地上の人生で会う不特定多数の様々な人々である。ここではクリスチャンは自分の隣人を愛するだけでなく、敵さえも愛しその人のために祈るようにと教えられている。これは執り成しの

祈りであろう。→ルカ23:34, 使徒7:60、I ペテロ3:9

私たちはこの世にあって降りかかってくる様々な問題、困難、敵対する人々、その他多くのことに直面する時に、天の父なる神が愛をもって彼らに対するのと同様に私たちもそのように対処することが求められているのである。

[45]「天におられるあなたがたの父の子どもになるためです。父はご自分の太陽を悪人にも善人にも昇らせ、正しい者にも正しくない者にも雨を降らせてくださるからです」

天の父なる神は天地万物を創造された神であり、太陽を毎日昇らせ、雨を降らせてくださるお方である。そしてそれは人間にとって収穫や生活のために必須のことである。それは正しい人だけではなく正しくない人、すなわち善人にも悪人にも分け隔てなく、そのようにしてくださる。あなたがたもそのように敵対する人、信仰のゆえに迫害する人を愛し、祈りなさいと言われる。神がすべての人を愛しておられるように、私たちにも同じようにあるよう勧めておられるのである。その目的は「あなたがたが天におられるあなたがたの父の子どもとなるため」なのである。私たちは名目だけ、口先だけのクリスチャンであってはならない。

[46]「自分を愛してくれる人を愛したとしても、あなたがたに何の報いがあるでしょうか。取税人でも同じことをしているではありませんか」

当時のイスラエルはローマ帝国の支配下にあり、ユダヤ人は各地方の税金とともにローマ皇帝にも税金を納めなくてはならなかった。それゆえ彼らは神を知らぬローマ人や領主などに搾取されると言って納税を非常に嫌ったのであった。「取税人」はこのいやな役目を請け負い、敵国のために働くユダヤ人、売国奴であった。しかも彼らは一定の税金取り立てを請け負ったばかりかさらにそれに水増しをして国民からそれ以上の金を取り立て、差額を着服していたのであった。

イエスはこのような取税人でも自分を愛してくれる人を愛しているのではないかと、人間社会において当然のことを例にあげて教えられる。

[47]「また、自分の兄弟にだけあいさつしたとしても、どれだけまさったことをしたことになるでしょうか。異邦人でも同じことをしているではありませんか」

「異邦人」とは文字通り外国人のことであるが、彼らは聖書を知らず、真の神を知らず、人間が手で作った偶像を神として礼拝をする者であり、今、自分たちの国を支配しているローマ人もその中の一つであった。そしてユダヤを治めているヘロデ大王もイドマヤ(エドム)人であった。

そのような異邦人でも兄弟(この場合は隣人)にはあいさつするではないかとこれも当然のこととして例にあげられる。

このように見えてくると、イエスが44節で言われた「敵」とは「迫害する者」「悪人」「取税人」「異邦人」と呼ばれる人々で彼らに共通するのは真の神を信ぜず、従わず、自分が神の前に罪ある者であることに気づかず、ある時は善を行い、ある時は悪を行い、世の中とは、人間とはこんなものだと思って生きているこの世の一般の人々でもあると言える。しかし、その一般の人々がクリスチャンの敵となり、迫害する者となるのである。

エペソの町でパウロが福音を宣べ伝えていた時、多くの人々が信仰に入った。ところがエペソの町にはギリシャ神話の肥沃と多産の女神アルテミスを祭る壮大なアルテミス神殿があり、その神殿の銀細工の模型を作って、それでかなりの収入を得ているデメテリオという人物が、人々が福音を信じるようになってアルテミス信仰が廃れ、商売も上がったりになってきたことで同業者たちを集めて暴動を起こしてパウロたちを捕え、つるし上げようとした。これは自分たちの生活を脅かされるとの思いから始まったクリスチャンに対する迫害である。→使徒19:23~40

ピシディアのアンティオキアでは福音を伝えるパウロに対するねたみに燃えたユダヤ人たちが反対し、口汚くののしった。→使徒13:14~45

リステラではパウロはユダヤ人たちに石で打たれて死にそうになった。→使徒14:19

では私たちクリスチャンはそのような目に合わないために口をつぐみ、密かに信仰を守って無難に生きていくべきなのか。そうではない。そのためにイエスは「自分の敵を愛し、自分を迫害する者のために祈りなさい」と言われるのである。そしてその目的は私たちが天におられる父なる神の子どもになるためなのである。

この「愛」は原語は「アガペー」という言葉で神が私たちのために示して下さっている愛。そのひとり子イエス・キリストを私たちの救いのためにこの世に送り、十字架につけて私たちの罪を贖ってくださった、見返りを求めない愛である。信仰者はその愛をもって自分に敵対する人、迫害する者のために神に執り成しをし、祈るのである。もちろんこれは自力でできることではない。しかし、私たちは一方的な神の恵みによって、イエス・キリストを自分の救い主と信じる者とされたのであった。そして神の子とされ、私たちの信仰を助け導いてくださる聖霊が与えられている。→使徒1:8 それゆえ私たちも神の愛を受け、神の愛を知り、イエス・キリストにあって救われ

た者として、聖霊により頼みつつ、この世の人々に愛を示すことができるようになるのである。

[48]「ですから、あなたがたの天の父が完全であるように、完全でありなさい」

この「完全」とは私たちが神のように完全無欠、全知全能になるという意味ではない。そんなことは誰もできない。この原語は「テレイオス」という言葉で霊的成熟を意味することばである。すなわち愛において自分の敵を愛し、自分を迫害する者のために祈るような霊的に成熟した人になりなさいという勧めなのである。

私たちは他の人に対する苦々しい思い、肉的な思い、自己中心の思いを持つなどの不完全な状態を見るときに、自分がキリストに似た者になっておらず、守らなければならないこと、行わなければならないことをしていないことに気づく。しかし、だからこそさらに神の恵みにより頼んでいく必要がある。私たちは日々自我に死に、キリスト・イエスにあって生き、そして信仰のゆえに様々な苦しみを受けることがあっても、神が私たちに対して示してくださった愛を私たちも他の人に示し、霊的に成熟して歩んでいくことが大切である。

I ペテロ4:12~16

「愛する者たち。あなたがたを試みるためにあなたがたの間で燃えさかる苦難を、何か思いがけないことが起こったかのように、不審に思ってははいけません。むしろ、キリストの苦難にあずかればあずかるほど、いっそう喜びなさい。キリストの栄光が現れるときにも、歓喜にあふれて喜ぶためです。もしキリストの名のためにののしられるなら、あなたがたは幸いです。栄光の御霊、すなわち神の御霊が、あなたがたの上にとどまってくださいからです。あなたがたのうちのだれも、人殺し、盗人、危害を加える者、他人のことに干渉するものとして、苦しみにあうことがないようにしなさい。しかし、キリスト者として苦しみを受けるのなら、恥じることはありません。かえって、このことのゆえに神をあがめなさい」